

成覺房幸西の一念義

安 井 廣 度

幸西の一念義に就ては、恩師住田先生の『淨土源流章講義』にその大體を述べられたる外、未だ研究らしいものを見ない。そこで『玄義分抄』を中心に、一念義の經釋に對する見方とその内容を検討したので、これで彼の信境は充分に推察されやうと思ふ。もう少し啓蒙的に書いて書くと、その心持がよくあらはれるのであるが、冗長を恐れて簡固に説明した。引文と合せて意を得られない。

一

如來の本願は念佛往生の願であるから、淨土門に籍を置く限り誰人も稱名を否定する者はあるまじく、幸西も「三部の經旨正しく稱名念佛を宗とす」と申してゐる(抄マ三)。しかし、稱名の一多を實際的にどう受得すべきかといふことになる、多稱に依るものや、一稱を主とするものや、更に進んで一念に依る者があるべく、幸西は實に心念の一念義を主張したのである。蓋し本願には「乃至十念」とあるが、成就と附屬には之を「乃至一念」とちゞめ、又、『大經』の往觀偈にはたゞ「聞名欲往生」と説き、『觀經』の下中品には聞已即滅の機を説くから、大悲の極限は聞名の一念に在るが如く、彼はこゝに無限の大悲を拜して心念の一念義を立てたのである。

『玄義分抄』の宗旨門を見ると、彼は『觀經』の中心を眞身觀におき、先づ眞身の色相を觀する觀佛三昧を批判して之

を方便假説とし、次に眞身の名號を念する念佛三昧を此經の眞實の宗として、次のやうに之を讚へてゐる。云く。

「亦以念佛三昧爲宗」といは、眞身の名號を念する念佛を宗とすとなり。卽經云、「無量壽佛有八萬四千相乃至念佛衆生攝取不捨」云々。攝取不捨の行は宗也、不攝取捨の行は宗にあらず。釋云、「五從無量壽佛下至攝取不捨已來は正

明觀身別相光益有緣乃至廣顯念佛三昧竟」といへり。三部の經旨正しく稱名念佛を宗とす。凡そ時之相應、行之難易

已上、攝取之三緣、善之勝劣、諸經之讚嘆、三部之唯名已上、三心之具不、正雜之得失、正定之行業、廻向之有無、

業繫之無礙、佛法之不思議、機法之分別、滅罪之多少、往生之遲疾、經中之要益、善惡之差別、第九之受法、察華

之譬喻、退代之流通已上、別意弘願、成就之一念、佛智之大乘、往生之大利、無上之功德、法滅之止住、難値之至

極已上。舌相之證誠、諸佛之護念已上阿彌陀經。定散之所詮、三部之首尾、名號を宗とする事文義分明也。然則眞身の色相

(は)定善の(宗也)、眞身の名號は散善の宗也、兩宗共に眞身にあり。但定善を廢して散善を立し、衆行を毀して念佛を讚する事は、今經の肝心三部の骨目なり、唯三部の説のみにあらず、諸經も又如此、唯釋迦一佛の讚歎のみに非ず、諸佛も亦如此(抄 p. 15)。

彼が元祖を相承して稱名念佛の一道を歩んだことは此文にて粗く推察が出来やう。しかし、彼が鎮西のやうに能稱の功を募らず、業繫に煩はされず、聞名の一念に攝取不捨の益を見て、往生の大利を喜んでゐたことは、廻向の有無、業繫の無礙、第九の受法、攝取の三緣、往生の大利等を數へてゐるのでトし得べく、斯くて彼は、(第一)稱名念佛に就て三重の頓教を分別し、(第二)之を眞化に分ちて佛土の眞化に配し、(第三)化の念佛を願とし機とし、(第四)四種の捨行を説き、『大經』に依て心念の一念義を勧めたのである。

二

先づ(第一)(第二)の文に云く。

念佛の一法に付て有三重頓教。始對三櫻路經「一日七日專稱佛、對三聖道萬劫修功、淨土一日の頓教を顯す、上が上の第六門の六念の中の念佛なり。次に對三八萬四千利劍一聲は下が上の第八門の念佛也、是は淨土の中の一日等の漸教を櫻路に返し同じて捨取三聲頓也。今對此門々不同名漸教、先求要行は下が中の第九門の法也、是は心口相兼ねたる一聲を捨て、取三意業一念極頓等(一念抄)。
又云く。

彌陀有三種、一化身、像觀彌陀是也。玄義(五右)云、「由三衆生障重染惑處深、佛恐下生想、真容無由顯現、故使假立真像、以住心想、同彼佛以證境、故言假正報也」。今此觀經所說稱名彼假立彌陀名號也、若依此行、行者可得假立生、假立者胎生也、是即通諸佛、即文(散善義十三右)云、「言念佛者即專念阿彌陀佛、一切諸佛亦如是」。下品等念佛同之、此彌陀諸佛相望互可、論親疎得失、是名爲機、且雖有順、彼佛願利益、若比増上大利、全非比較也。二報身、是別意弘願彌陀也。玄義(十八右)云、「又無量壽經云法藏比丘在世饒王佛所、今既成佛即是酬因之身也」。託彼願爲増上緣、如說大經(序題門參照)、念彼彌陀即念十方一切諸佛也、全無彼此不同差別、故名念佛三昧、具如真身觀文(稱佛記)。

こゝに第六門とか第八九門とかいふのは、『散善義』の初に出てゐる所謂十一門中のそれで、善導は『觀經』の九品往

生にそれ〴〵十一門の相があるとし（經文には具略あり）、第六門を正明に受法不同と科し、第八門を明に廻に所修行願生彌陀佛國と科し、第九門を明に臨に命終時聖來迎接不同去時遲疾と科したのである。そうして上々品には、第六門に受法の不同を説いて、その中の修行六念中に所謂諸佛通相の念佛を出し、下上品には第八門の中に受法を説いて一聲の念佛を出し（散善義廿三左、玄義分十三右、般舟證廿七左參照）、下中品には第九門の中に受法を説いて聞名の一念を出すのである（散善義廿五左參照）。

そこで、右の二文に依て彼の念佛義を約すると、先づ之に諸佛通相の念佛と彌陀別相の念佛とがあつて、前者は彌陀の本願を見ざる諸佛並々の念佛であるから、それが稱名であるといふ點で聖道門の多劫の修功に對して頓教といはれ得るが、彌陀別相の念佛に對せば猶漸教に攝せられ、又、彌陀別相の中、多稱は一稱よりも行執が深いから、諸佛通相の念佛に對せば頓教といはれ得るが、一稱に對すると猶漸教たるべく、この點に於て、一聲の念佛に佛の大悲を拜するは行執が甚だ薄く、それ丈深く佛の大悲に觸れてゐるわけであるが、それでも聞名の一念に對すると猶漸教に攝せられて到底比較にならないといふのである。蓋し彼が聖道門をも諸行往生をも別時意趣の方便説とした意底から考へると、たとひ一聲の念佛でも行執がある限り、佛智佛願に甚だ近くして、その實千里の隔たりあるものとするが如く、そこで『稱佛記』には、前の二つ（下々品の十念や多稱を加へると三つとなる）と聞名の一念（眞身觀の念佛に同じ）とを眞化に分ち、前者を假立の化土に、後者を眞實の報土に配してその勝劣を述べたのである。

（第三）の文に云く。

「願行之義有何差別」と問して「如經中説」と答せるは、彌陀經の中に乃至一念を行とする義、其餘の諸善を願に攝

すべしと云義の差別ありと也、即文云く「衆生生者皆是阿鞞跋致」云々、大經の下卷の初に合す、即乃至一念を行とする義なり、又云く「不可以少善根福德因緣得生彼國」云々、是れ上の一念の義に對して説けり、故に「乃至一念會未措心」にして、諸善を行じて往生を願するものは「但言發願不論有行也」と也、斯乃諸善をきらふか故に行に隱顯あり、例せば、顯の一乘に隱顯の行あるが如し、又、行を帶して願と云事は、例せば、受法を具しながら機と云ふが如し(抄 p. 14)。

機の堪は正く九品の中の「依教稱佛乘念即生」(玄義分十三左)の文に合してしるべし(抄 p. 15)。

「乘念即生」といは、稱名及已前の諸行皆機なる事を標す(抄 p. 15)。

除斯已外一心信樂求願往生」(玄義分六左)といは、遇大のもの、「上盡一形下收十念」(同上)といは、已に第八の受法によれるもの也、是則ち念佛三昧を受くべき機也(抄 p. 16)。

この中、第一文は『玄義分』の別時意會通を釋する下に出てゐるので、乃至一念を眞實の行とし、他の諸善(一稱多稱をも收む)を貶しめて願とする意を述べたものである。即ち、『小經』の「衆生生者皆是阿鞞跋致」の文を『大經』下巻初の第十一願成就文等に合して、乃至一念をのみ阿鞞跋致を得る所の行とし、下の「不可以少善根」の文に對して、乃至一念以外の衆行はすべて貶しめて願としたのである。次に後の三文の意味は、乃至一念の救ひから回顧すると、諸行を行する者はもちろん、たとひ稱名の行者でも能稱を募るものは、眞の念佛三昧を受くべき機に止るといふのであつて、下々品の行者は善知識の教に依て十聲佛の御名を稱へたが(依教稱佛)、實はその稱名を機として、乃至一念の法(行)に依て淨土に生れたのである(乘念即生)と、斯く彼は解したのである。こゝらは幸西一流の筆格であつて、前

に引く所の『稱佛記』の文に「是名爲機」とあるも此意味だと思ふ。

三

(第四)の文に云く。

「又來論中」已下は結して論の本意をのぶ、先づ聖道をすて、淨土を行ぜしめ、次に衆行を捨て、念佛を行ぜしめむと也。然るに、聖道を捨て、淨土を行ぜしむる事は正く華嚴經の意に依る、上品下生の釋の文、說偈の發願等に合す。定善を捨て、散善を行ぜしめ、諸行を捨て、稱佛を行ぜしめ、多稱を捨て、一稱を行ぜしめ、諸佛を捨て、彌陀を行ぜしむる事は、法華經觀經等に依る。四の捨行の中に終りの一は唯觀經也。口稱を捨て、心念を行ぜしむる事は大經に依る。此事を眞實として余門余行を別時とする事は正く阿彌陀經に依る也。「引聖教來明」といは此等の諸經を指す也(抄_上、_中)。

彼は善導の別時意會通から天親(無著)の教學を顧み、善導の教學に天親をむかへて釋尊一代の經意を明にしたので(抄_上)、諸經の歸結を稱佛の一行に見、『觀經』に於て彌陀の稱名をながめ、『大經』に依て聞名の一念を確め、『小經』に依て余門余行を別時とする所以を明にしたので、『略料簡』には之を約して「具三經者必持心若少一經即不成」と述べ、凝然は次のやうに之を述べたのである。

具三足三經淨教義成、用大經爲取本願、用觀經者爲歸稱名、用小經者爲取佛證、是故淨土三經具足念佛往生成就圓滿(源流章)。

四

幸西は稱名念佛を三經の宗とし、その稱名に就て「三心の具不」等を數へてゐるから、元祖を相承して行具の三心に關心したことはいふまでもなく、その名目も一二回出てゐるのである。しかし、彼に在つては『觀經』の三心は彼の所謂一念の心相に外ならないのであるから、次にすゝんで一念の内容を討ね、かねて三心の意味をも明にしたいと思ふ。

安心門に於ける彼の「一念」はもちろん稱念ではなくして心念の義である。そうして彼は之を「一念心」とも「一心」とも又單に「心」とも呼んでゐる。然るに彼は此語を佛の上と衆生の上と兩方に使用したので、先づ次の文に注意せやう。如來能度^ノ是心^ハ、心者智^{トハ}、能度^{ナリク}物^ス、眞實^ハ唯一念心也。衆生所^ヲ度^セ是亦心^{ナリ}、心者智^{トハ}、智^ヲ所^ヲ度^セ（是亦唯一念心也）、正門無^シ外是即心^ニ、一乘不^ハ他^ス是即心^ニ（二諦記）。

何か哲學の講義でも初まりそうであるが、後の引文を見てもわかるやうに、之はたゞ一念心を佛の上と衆生の上に認め、佛上の一念と生上の一念と冥體無二にして往生を得といはんとするものである。

さて、佛上の一念といふは如何なるものであらうか、彼はかう述べてゐる。

言^ニ一乘海^ニ者法喻雙標也、一乘者即弘願、弘願者即佛智、佛智即一念也。海者如^ニ衆流入^レ海、一切善惡凡夫皆歸^ニ彼智願海^ニ得生也（略料簡）。

念佛三昧といは、釋名の南無阿彌陀佛、序題の弘願、説偈の一乘也、何ぞ一乘と名くる、一乘といは無二無三の義

なり(抄 p. 32)。

一乗といは弘願、弘願といは南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛といは念佛三昧、念佛三昧といは佛智、即大乘廣智也、群萌を運載して廣く生死を出す、是れ諸佛の無上の智恵、眞實の大乗也、此の外敢て眞の大乗なし、無二也無三也。佛の方便の説をば除く(抄 p. 33)。

然れば則現身得不退の益、捨身他世の往生、唯此の一念の大乗に乗じて無二無三也(抄 p. 33)。

「願行相扶」とら云は、但往生を願じ、但一念を了するのみ、願行相扶て所爲皆尅すと也(抄 p. 33)。

之に依ると、一念といふは佛が衆生を度し給ふ心で、行々相對すれば稱名といはれ、その本質をたゞせば南無阿彌陀佛の名號であり、又、因位に約して弘願、果上に約して佛智(光明)といはれ、一切諸佛の智恵を極むる意味に於て諸佛無上の智恵とも稱せられるので、之を眞實の大乗一乗とするといふのであらう。但し、此等の語は各派に於てそれ／＼理解を異にするのであるから、直に以て彼の意を斷定し難いが、彼が『觀經』の住立空中の彌陀を喜び(抄 p. 34)、攝取不捨の光益を説き(抄 p. 34)、無緣の慈(抄 p. 34)、満足大悲(抄 p. 34)等の語を用ひ、又、之を海に喩へてゐることに注意すると、一切善惡の凡夫をその機のまゝにおさめたすくはんとする佛の眞實心となすものゝ如く、『觀經』眞身觀の念佛三昧と下中品の聞名とを一つにして、之を『大經』の乃至一念に會合することからでもそう疑はれるのである。即ち佛上の一念とは、機の善惡を簡はず信するものをおさめたすくはん彌陀の無限の大悲(眞實心)と解されるのである。

次に生上の一念といふは如何なる信境であつたのであらうか。彼はかういつてゐる。

衆生所度是亦心、心者智、智所度(前引)……捨_レ邪心也歸_レ正心也、捨_レ小心也探_レ大心也、捨_レ漸心也探_レ頓心也、捨_レ聖心也探_レ凡心也、二河亦心也、白道亦心也、是亦唯一念心也。是名眞實心、是名深心、是名願心、故云具此三心、必得_レ生也(一諦記)。

何が故ぞ歸三寶の先に發願をすゝむるとならば、必ず佛心と相應して三寶に歸すべきか故也、此の願即稱諸佛本願意也、自余の衆願は歸せざるが如し(抄 p. 1)。

菩提心は願往生の心に歸す、往生の心は決了の心に歸すべし、たとひ往生を願すと云とも教を決了せずば眞實心にあらず、深信心にあらず(抄 p. 3)。

但能依_{クテ}此經深信行者與_{スル}佛心相應と也(抄 p. 1)。

理の教より事の教に入るを相應といふ。即教意に相應す、定散の次第も又_レ如此、理事定散乘願等の次第若し一々に違せずば、佛教に相應し佛意に相應し佛願に相應すと云べき也、已に「乘願往生乃至果極菩提」云云。當_レ知、南無阿彌陀佛といは決定成佛の因也と云事を、故に此經の中には「若念佛者乃至常座道場」といひ、大經の中には「其有得聞彼佛名號乃至則是具足無上功德」といひ、法華經の中には「一稱南無佛皆已成佛道」と云へり(抄 p. 11)。

今願の眞實の相を結して行者の安心を定む。當知、南無阿彌陀佛と念する外に歸命も入るべからず、發願も入るべからず、廻向も入るべからず、唯佛智を了する一心に皆具足すと也(抄 p. 46)。

この中、第一の文は可なりに難解であつて、なかには二河も白道もすべて我々本有の心性とし、彼の説を天台の性具性惡の義に同ぜしめんとするものがある。しかし、既に住田先生が注意せられたやうに、それはもつと淨土門的

に解すべきものであつて、その意は『觀經』の三心を説明したものでらしく、邪、小、漸、聖を捨つるも三心であれば、正、大、頓、凡を採るのも三心であり、又、貪瞋の二河を貪瞋の二河と知るのも三心であれば、四五寸の白道を四五寸の白道と知るも三心で、しかも、この心は佛上の心と本質を一にするから、前の「眞實唯一念心也」といふに對して「是亦唯一念心也」と述べ、それが三心の内容に外ならぬから、「是名眞實心」是名深心「是名願心」云々と結んだのであらうと思ふ、彼の文章は甚だ簡固で往々言葉をたさないと意味の取れない場合があるので、今も少し言葉をたして「二河亦心也白道亦心也」の二句を斯く解釋したのである。そうして凝然が釋したやうに、彼は義に約して三心を分けたが、體を尅するとそれは唯一念一心であつて、その事は第二第三第四の引文にも見られるであらう。即ち、生上の一念は三心で、それは攝取不捨の佛智一念を了する心なのである。

五

斯くて、彼はこの一念を佛智に契ひ佛心に相應するものとして一念に業成すといひ（略料簡）、又、その體を無漏の善とし（抄マニ）、諸教の修道に同する見を絶待に排して（抄マニ）、定散諸善と全く行相を異にすと注意し（略料簡、抄マニ）、次のやうに之を述べてゐる。

此の念佛三昧（一念）は定散に非ずしてしかも定善也、其の行想息慮凝心にあらず故に定善にあらず、雖然必ず定善の益を得るが故に定善の名あり、散善にあらずしてしかも散善也、其の行相廢惡修善に非ざるが故に散善にあらず、即ち界内の廢惡修善にあらずと也、又廢惡修善なるが故に散善也、總じて有爲有漏の善惡を廢するを廢惡とし、無

爲無漏の生因を修するを修善とす、是真實の廢惡修善也。因果にあらずしてしかも因果也、界内の因果に非るを非とす、所謂人天の因果にあらず、三乗の因果に非ず、又、界外の因果なるが故に因果也、所謂報土の因を修して報土の果を得也（抄 p. 33）。

論じ來り論じ去れば、彼も行きつく所へ行きついてゐるやうで、深く感銘せしめられるものがある。猶、最後の文に「南無阿彌陀佛と念する外に歸命も入るべからず發願も入るべからず」云々と述べてゐるのは興味の深い文であつて、既に各種の引文にあらはれてゐるやうに、彼は飽くまで行的な計ひを批判し、純粹に純粹にと内省したる結果、一念の心相まで批判せねばならなくなつたので、歸命や發願廻向に因はれないやうに、之を佛智を了する一念心の具徳とし、唯南無阿彌陀佛と念するより他はないと表白せるものゝ如く、しかし、こゝに眞宗でいふ所の法體募に似て、その實、意業募に陥つてゐる様子が偲ばれるのである。蓋し彼も他の異流の流祖と同じく、他力廻向の大悲に達せず、名號聞信の方面を閑却したるがため、信智一體を談じつゝ、實は一體に墮したのであつて、我々が宗祖に於て見るやうな信仰のゆたかさ、に接し得ないのは、甚だ遺憾である。

六

最後に一つ残されてゐる問題は、彼の信後の生活である。特に稱名の用不である。

之に就て、舜昌の『法然上人行狀畫圖』終に、次の記事が出てゐる。

上人の門弟、そのかず侍し中に、宿老の世にしられたるをえらびて、その行狀をしるしおはりぬ。このほか、法本

房行空、成覺房幸西は、ともに一念をたて、門徒を擯斥せられき。

更に下つて、西譽の『五重拾遺鈔』中四左には、「成覺坊等者、彼人依被放門徒下州栗原移住勸道俗、今彼門人在之云々」と記し、又、了譽の『決答銘心鈔』上三丁には幸西放文のことが出で、『五重拾遺の見聞』には、「下總の國栗原と云在所に道場を建て居住し給ふ、近年まで其跡ありし也云々」と傳へてゐる。しかし、行空が「十戒毀犯の業を勸め、恣に余佛の願を謗り、念佛の行を違失す」といふ理由を以て罪科に問はれ、更に破門せられたことは『三長記』等に出てゐるが、幸西のことは鎮西の末書と『法然聖人十卷傳』以外に出てゐないし、又、彼の一念義は行空のそれとは意味を異にし、又、別に放縱放逸の跡も見えないから、定めて一念義を蛇蝎視する結果、斯かる記事を捏造したのか、それとも門下の中にさういふ者がゐたのを幸西に誣いたのではないかと考へられるのである。又、鎮西派では親鸞聖人を幸西の弟子とするものがあるから、栗原移住の記事は、下總邊の眞宗門徒の消息を誤傳したものと察せられるのである。そこで、さうした傳説を離れて、虚心に彼の教學を顧みると、しかしそこに唯一つ審かしいことは、彼の遺著の何れにも、起行の稱名を勧めてゐない事であつて、若しこの關點にたつならば、或は口稱を捨てたのではないかと疑はるゝ節もある。殊に、彼は乃至一念を眞實の行とし、四種捨行の下にも「口稱を捨て、心念を行ぜしむ」といふから、起行といつても、それは稱名ではなく心々相續の義に解されるのである。されば、唯一箇所一念義を論證した後、「雖然なを相續を勸む」(抄下)といふが如きも、この意味に解し得べく、『源流章』に「能所無二信智唯一念々相續決定往生」といひ、「行者信心契佛智故念念即與佛智相應」といふも、この義に解されるのである。しかし、私はやはり彼を稱名の行者とするのであつて、それは次の理由に基くものである。

一、元祖は如來の本願を念佛往生の願と稱し、自行化他唯念佛を緯とせられたから、行空の如き無念の新義を除いて、元祖門下は概して念佛の行者であつたと察せられる。

二、彼は三經の宗を稱名念佛として稱名の徳を廣く數へてゐるから、彼自らも稱名の行者たるべく、又、乃至一念は行者の安心を定めたものであるから（抄ヲモ）、直に起行の全相に及ぼし難く、別時門は全體往因を決擇する所であるから、彼も「諸門諸行は皆方便にして唯一念往生のみ眞實なる事を知しむ、此の門は正く因を定む」と斷つてゐる。即ち、彼は稱名の稱へ心を反省して、稱名に如實と不如實とがあるがために斯く乃至一念を強調したのであつて、それは寧ろ眞の稱名往生を成ずるものと解すべきであらう。

三、『稱佛記』にかう述べてゐる。

然正十方諸佛所護念有願極樂稱彌陀、若實欲得不退者且轉菩提心願極樂、聞諸佛稱彌陀、但稱一念佛身唯彌陀與衆生彼此三業不相離、無諸佛三業外加一唯有念眞身名號諸佛與衆生彼此三業不相捨離、何以故念眞彌陀即由念十方一切諸佛故、彌陀經中云、聞是諸佛所說名及經名者乃至一切諸佛共所護念皆不退轉者正指眞身名也。

『稱佛記』といふ名も注意を要するし、又、こゝに「彼此三業」といふからには起行門に於て彌陀を稱禮念したことを偲び得べく、凝然も亦之を解して、「此意說云、三業不離有其二重、稱念化身唯與彌陀三業不離、稱念報身行者三業與諸佛三業不相捨」と解してゐる。

四、幸西の立場として淨土往生に對する行執は破すべきであるが、喜び／＼稱へる念佛を破すべき何の理由もな

く、又、かうして信の上の稱名を認めても、彼の教學に何の矛盾も生ぜないのである。

私は以上の理由から彼を稱名の行者とするのであつて、かくてこそ、彼が一方に於て稱名を批判しつゝ、而かも平氣に稱名の語を使用した意趣をも明にすべく、從て又、前に引用する、「雖然なを相續を勸む」といふ句の如きも、偏に心々相續の義にのみ解すべきではないであらう。

但し、現存の遺著に就ていふと、彼があからさまに起行の稱名を勸めてゐないのは、又、稱名を輕視したらしいのは（信仰の結果として）、何としても物足らぬ所であつて、この心念本位の行き方は、門下の人々を躓かせたるが如く、又、それが此派衰亡の因となつたやうである。